

明日は私の四十の誕生日である。

十二年前に結婚した夫は、ケーキ買ってくるね、と残して会社に行った。いい夫だ。周りからもよく言われる。このご時世に専業主婦でいられる人は中々いないのよ、と。自分でもそう思う。

朝食の食器を片付けて、軽く掃除機をかける。床はあまり汚れていない。毎日掃除をしているのだ。洗濯をして、買い物に出かけることにした。

外は初夏の柔らかな日差しで溢れていて、僅かな湿気と草の香が鼻腔をついた。沿道を歩く。人とすれ違う。子連れや老夫婦、スーツを着た若者。

私には子供がない。不妊治療はしなかった。それは二人で考えて決めたことだった。愛の結晶、欲していたことに違いは無いが、二人でも十分幸せだった。お互いの父と母も了承してくれた。

ふと、カラフルな外壁が目に入った。記憶に無い景色、どうやら新しい店ができたのだろうと思った。店の前に回り込むと、画材屋だった。

様々な色、絵の具の香り、窓から射す日光・・・

私は中学生の頃美術部だった。部、といっても部員は三人だけで同好会のようなものだ。

引き寄せられるように店内に入った。小さい店だが品揃は良い。店主は気さくな人だった。何も購入しないのは失礼かなと思ひ、帰り際に水色の絵の具を購入した。

水色、何の気なしに選んだつもりだったが、私の頭の中には一際目を引く、水色が染み込んだパレットがあった。無造作に伸びた髪、汚れた青のシューズ、白いシャツに浮く水色。彼の絵は水色ばかりだった。海、空、透明の花瓶。

買いた物を済ませ、家路についた。帰宅早々押し入れを漁る。奥の方に懐かしい画材がある。絵は描かなくなったが、捨てられなかった。

一心不乱に描いた。記憶の奥の絵、目の前の絵。久しぶりに描いたものは見られたものじゃない。腕は重く、イメージは厚い埃に埋まっている。

ブラウスの袖に水色のシミができた。思わず笑みがこぼれる。

時計を見て、パレットを閉じた。夕飯の支度をしなければならない。